

## 2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

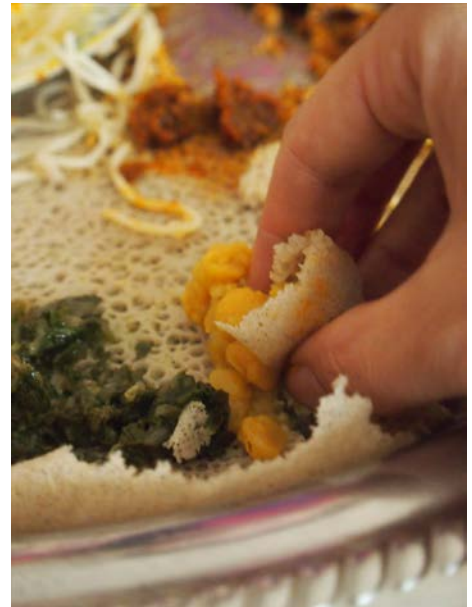
学校名	関市立下有知中学校	氏名	吉田 麻里子
-----	-----------	----	--------

### <印象に残る写真2点>

#### ●写真1 [4179]

インジェラ、いただきます！

エチオピア人の大好きな主食インジェラ。初めこそ、その食感や味わったことのない酸味に恐る恐る手を伸ばしていたが、最後にはエチオピア人に負けじと豪快に。「いただきます！」



#### ●写真2 [5506]

エチオピアの子どもたちの笑顔

生活の環境は、決していいとは言えない。しかしほじける笑顔で、「I'm happy!」と言う子どもたち。「本当の幸せ」「豊かさ」って何かを考え続けた研修だった。



### 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

#### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は社会科の教員として、中学校で「アフリカ」や「国際協力」などについて教えている。その中で、教科書や資料集、インターネットに載っている情報だけでなく、実際に自分の目で見て確かめた「本物のアフリカ」を生徒たちに伝えたいという思いが芽生え、今回の研修への参加を決意した。また、自分自身も「国際協力」という点において、自分ができることは何か、子どもたちに対して何ができるのかを知りたいというもう一つの目的もあった。一つ目の目的については、事前研修でテーマごとにどんな教材をどのように集めるかということ整理して出発できたこともあり、多くの写真や動画、インタビュー映像などを持ち帰ることができた。二つ目の目的については、開発途上国の援助の形には様々あり、自分ができることも多くあると感じた。何よ

りまず自分が、自分の目で途上国の現状を見たり聞いたりする中で、疑問をもったりいろいろな角度でものを考えたりすることができるようになったことが大きな収穫である。

## 2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

### （1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

渡航前は、デモが起こっているという社会的情勢や自分と異なる褐色の肌の人たち、主食の「インジェラ」への不安など、エチオピアに対し決して肯定的な印象をもっていたとは言えなかった。しかし、実際に自分の足でエチオピアの地を歩き、そこに暮らす人を知れば知るほどエチオピアを訪れる前に抱いていた否定的なイメージは薄れていった。無表情で立っていた知らない人でも「サラムノー」と挨拶するとニコリと笑って「サラムノー」と返してくれるあたたかさ。「コーヒーセレモニー」で客をもてなすという、日本の「おもてなし」にも通じるもの。学校訪問や街中で出会った子どもたちの人懐っこい笑顔。一方、現地ではエチオピアの抱える多くの問題や課題にも直面した。しかし、事前に調べた情報やその地で経験したことなどを合わせてその課題について、多面的・多角的に考えてみるとより肯定的にエチオピアを捉えることができるようになった。そして、人々との交流により、エチオピアをより身近に感じられるようになった。

### （2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

遠いアフリカの国であるエチオピアに日本とのつながりなんてあるのかと思っていたが、今回の研修でたくさんつながりを見つけた。物質的なつながりで言うと、街を走る車は「TOYOTA」ばかり。実際に現地の人と話をしても日本といえば TOYOTA の名前を挙げる人が多かった。精神的な面では、JICA エチオピア事務所の神所長から、「日本とエチオピアは似ている」との話をうかがった。植民地支配を一度もされていないという歴史的背景から、民族や文化に対する誇りや自分たちの価値観を重視するとのことだった。実際に、現地の人と関わる中でそのようなことを感じる機会が多々あった。また、青年海外協力隊の方々の活動やエチオピアの企業や学校現場への日本の KAIZEN の普及などにも日本とのつながりを感じた。どちらも、押し付けるのではなく、相手の国を重んじながら、そのニーズに応じていくことがとても大切であると感じた。

### （3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

日本とエチオピアの共通の大きな課題は、「教育」ではないかと思う。両国の課題である女性の社会進出や環境保護の問題など、いろんな側面からその解決法を考えていくと、必ず「教育の充実」ということにつながってくる。しかし、共通の課題はあっても、国の状況は大きく異なる。互いの国の状況や価値観を受け入れながら解決していかなければならない。今回の研修を通して、「JICA の行っている持続可能な支援の在り方」と、「教育」とは非常に似ていることに気付いた。教育は、持続可能でありたい。学校で教わったことなどを自分なりに考えて、未来を自分でつくれるような子どもたちをつくりたい。子どもたちが大人になった時に、世界が幸せであるように、そんな視点をもった大人になれるように、まずこれから目の前の子どもたちに真剣に向かっていきたいと思う。教育のもつ力とその可能性の大きさを感じた研修だった。（吉田麻里子）

## 3. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の研修で JICA のいろいろな支援の様子を見させていただくことができた。特に、青年海外協力隊の活動は、相手のニーズや文化、習慣に合わせてながら熱心に行われていた。その職場や地域の方々に受け入れられていることもよくわかった。JICA の国際協力事業は、単にこちらが与えるだけでなく、支援が終わった後も地域の人たちの手で持続可能な技術支援をしているところがすばらしい。そんな支援を続けているからこそ、国と国、人と人のつながりは深まっていくのだと思う。さらに今後は、この活動の内容を日本にいる人たちに広く知ってもらえるとよいと思う。教科書の情報ではなく JICA だからこそ持っている生の情報を、国際協力

に関心がある人のみならず、教育現場等で広く伝えることができれば、将来、世界のことを自分のこととしてとらえ行動していくことができる人が増えていくのではないかと思う。

#### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

##### ⑥ チャンピオン商品（エチオピアン・ハイランド・レザー）取扱店舗【松田／吉田】

エチオピアは、シープレザーの生産が有名である。エチオピアのレザーは、皮膚の薄さと毛穴の数の多さが特徴だ。皮膚の厚みはその薄さと軽さに、毛穴の多さは、表面のきめ細やかでなめらかな触り心地につながる。エチオピアの多くのヒツジの中でも選りすぐられた特別なシープレザーだけが、「ハイランドレザー」として世界中の国々へ届けられている。アディスアベバでは、そんなハイランドレザーの商品を取り扱う2つの店舗を見学した。実際に商品を触ってみると、それはとてもなめらかで軽くて驚いた。現地の方の話では、デザインの良いものなどは、多くは海外に輸出されるので国内には残っていないとのことだった。「レザーのイメージを変え、レザーの使い方を変え、レザーのある暮らしを変えていく」をキーワードに「ハイランドレザー」をブランド化することで、デザインや質を改良し、世界にアピールすることができるように努力している。エチオピアのレザーの良さが認められ、世界に広がり、現地の人々の生活の向上につながることを願う。（吉田麻里子）

##### ⑧ ジレン No. 2 小学校訪問【吉田／木下】

ジレン No.2 小学校では、午前中はオロミア語（この地域で話されている言葉）での授業、午後からはアムハラ語（エチオピアの公用語）での授業が行われる。どちらの言語で授業を受けるかは、その民族により異なり、家族で相談して決める。民族によって言葉が異なり、教育を受ける言語が異なることに驚いた。校舎を見学すると、窓は割れており、壁にはたくさんの落書き、天井は穴が空いていた。現場の先生方は教材が不足していると言ってみえた。日本の教育現場との違いを感じる光景であったが、ここで学習する子どもたちの様子を想像した。一方、ジレン No.2 小学校では、アクティブラーニングを取り入れた学習をしているということだった。日本との共通点を知りうれしくなった。15歳の男の子にインタビューすることができたが、「エチオピアを変えたい。もっと教育を受けたい。そして自分が大人になったら村に新しい学校をつくって貧しい子どもたちに教育の機会を与えたい」と真剣なまなざしで語っていたのがとても印象的であった。（吉田麻里子）

##### ⑩ 青年海外協力隊（環境教育／観光）活動＋⑫ インジェラ体験教室＋8/11 ハチミツ屋【吉田／油科】

青年海外協力隊としてボンガに派遣されている村岡すずかさんと牧秋宏さんにお会いした。村岡さんは、学校などを回り環境に対する教育をされており、牧さんは現地の県庁で観光のパンフレットを作るなど精力的に活動してみえた。エチオピアの地方で、現地の人々のために一生懸命働いている姿がとてもまぶしかった。現地の少女の教育推進のためにNGOを運営しているアシャナフィさんにもお会いし、女性教育の課題の解決に向けての話を聞き、感銘を受けた。

また、バルタ小学校の近くにあるお家にお邪魔させていただき、インジェラをつくる体験をさせていただいた。一般の家庭でどのように主食であるインジェラがつくられているのか（テフ粉から発酵させてインジェラになるまで）をガネットさんというお母さんに詳しく教えていただいた。あのインジェラが蒸し上がる香りは忘れないだろう。チラ村では、養蜂が盛んで、道路沿いにあったハチミツ屋さんに寄って2種類のハチミツを試食させていただいた。花の香りのする味わい深いハチミツで、お土産に1kg購入した。（吉田麻里子）

##### ⑬ 飲料水用ロープポンプの普及による地方給水衛生・生活改善プロジェクト【松田／吉田】

手掘りの井戸は、安全面への不安だけでなく水汲みの労力も要し、また外にバケツ等を置くことから衛生面についての不安もあり、飲み水として適さない。そのため、飲料水用ロープポンプの設置を推進し、その設置に関する技術協力を JICA が行っている。ロープポンプとは、ロープで浅い地下水を家庭で引き上げるもので、ハンドルを回すだけで水を引き上げることができ、井戸から水を汲むよりはるかに容易であった。エチオピアの安全な水へのアクセスは、全国的には約 50%と他のアフリカ諸国の平均と比較しても低い。生活の基盤となる安全な水へのアクセスができるように、このロープポンプの普及が進められていることが分かった。設置後もメンテナンス等を自分で行うことができるようになっている。日本が技術支援を行い、支援が終わった後も現地の人たちの手によって続けていくことができるように、部品の製造業者や設置のための技術者の育成を行っていた。JICA の持続可能な支援の在り方に共感した。(吉田麻里子)

#### ⑮ 青年海外協力隊（服飾）活動／生産性向上センター [吉田／近藤]

青年海外協力隊の佐藤恵利さんの職場である、服飾の職業訓練校を見学させていただいた。ここでは、区役所での書類があれば 2 週間の訓練を無料で受けることができるそうだ。近くに縫製の工場がたくさんあり、ここで技術を身に付けたあとすぐに働くことができるため、人気のようだ。14 歳の研修生もいるということを知り、エチオピアの現状を知った。佐藤さんのカウンターパートの先生は、「恵利はとてもよく生徒を見てくれるし、賢く言葉もよくわかる。そして本当に一生懸命働いている」と話してくださった。その言葉から佐藤さんをととても信頼しているを感じたし、これまでどれだけ佐藤さんが職場に溶け込み、エチオピアの人々に積極的に関わってきたかがわかった気がした。それは、訓練校で生徒に親身になって丁寧に教える姿や、先生との会話の中でも十分伝わってきた。エチオピアの地において、現地の人のために熱心に働く日本人の活躍を知ることができうれしかった。(吉田麻里子)

#### ⑯ アディスアベバ市内教材収集 (8/9 スーパー、8/10 JAPAN マーケット、8/13、8/16 スーベニア ショップ、8/14 スーパー、8/15 シロメダ) [木下／吉田]

アディスアベバでの教材収集は、大きな楽しみの一つでもあった。エチオピアの地を歩くこと、これがもはやすべて教材になるものなのだが、スーパーやマーケットにおいて、エチオピアの食べ物や伝統的な衣装、楽器など売られているものを見たり、購入したりすることもエチオピアを知るよいきっかけになった。スーパーには特産品であるコーヒーが何種類か売られていた。また、スーパーで扱われているものの中には輸入品も多く見受けられた。輸入品や品ぞろえの少なさは、製造業がまだ十分に発達していないエチオピアの現状を表しているようにも思えた。JAPAN マーケットでは、様々なものが売られていた。野菜やコーヒーセレモニーの道具、エチオピアの特産であり人々が身にまとっているコットンのストールなど。ほかにもコーヒー屋さんがあったり、靴磨きの男の子がおり、靴磨きをしてもらったりした仲間もいた。日本に戻って授業で使う衣装や国旗などの教材も手に入れることができた。(吉田麻里子)

### 5. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

#### 【持ち物・服装】

- ・アディスアベバは蚊に刺されてもマラリアの危険はほとんどないと言われた。蚊対策は部屋にひと吹きする虫除けや虫除けのスプレー、虫刺されの薬で十分だったように思う。また、ダニや南京虫対策として虫除け効果のある寝袋も持っていった。地方へ行くほどダニの心配は増える。
- ・渡航前に一番頭を悩ませたのが服装だった。エチオピアは高地のため朝夕は特に寒くなる。日本は暑い時期だが、大げさでなくダウンジャケットがあると安心。小さくしまえるダウンジャケットやレインジャケットが役立つ。個人差はあるが、私は一番寒い時には、Tシャツ、パーカー、ダウン、アウトドアジャケットを重ねていた。脱ぎ着できる服装が一番。

#### 【学びの準備】

- ・出発前は学校の仕事で忙しいとは思いますが、現地の活動に関して調べたり、資料に目を通したりすることは必要だ。それが、より深い学びにつながり、短い時間の中で現地の人にも詳しく質問することができたからだ。
- ・名刺を準備していった。帰国後も連絡をとったり、名刺を見て出来事や人について思い出したりする時に役立った。

#### 【現地で】

- ・本当にたくさんの情報や刺激を受ける話に出会う。こまめに「マナビノオト」にメモすることをお勧めする。あとでやろうと思っても日常の情報量が普段より大変多く、思い出そうと思っても思い出せない。
- ・会計担当の方は、現地での集金、支出等その場できちんとメモを取ること。レシートがないことも多いため、帰国後の会計報告時に困らないようにしたい。

### 6. その他全般を通じての感想・意見など

この研修に参加させていただくことができ、本当に感謝している。自分の目で見ることの大切さを改めて感じた研修だった。今まで知らなかった多くのことを学び、今まで気付かなかった面にも気付くきっかけをもらった。研修前は不安もあったが、本当に実りの多い研修になった。そして、同じ志をもつ仲間に出会えたことも研修に参加してよかったと思うことの一つだ。研修中、一人ではできなかつたり、偏った考え方をしてしまったりしたときにも、みんなと力を合わせたからできたことも多かつたし、仲間の発言から新しい視点をもらい、広く考えることもできるようになった。これからもこの出会いを大切にしていきたいと強く思う。そして、最後に JICA エチオピア事務所の方々や JICA 中部、NIED・国際理解教育センターのみなさん、本当にお世話になりました。アムセグナッロフ。

以上